

# 月刊 水試ニュース

発行所：愛知県水産試験場(本場) 573号 令和6(2024)年4月

## 今期の春季シラスの来遊予測について

漁業生産研究所 海洋資源グループ

春季に渥美外海に来遊するマイワシ、カタクチワシ、ウルメイワシのシラスには、種ごとに来遊状況に特徴が見られます。まず先に来遊するのはマイワシシラス(以下、マシラス)で、早い年で3月下旬に来遊し、続いて水温の昇温に伴いカタクチシラスが来遊し、漁獲の主体となります。ウルメシラスの来遊は漁期を通じて少なく、漁獲の主体となることはありません。

(一社)漁業情報サービスセンターが提供する漁業情報によると、黒潮は引き続き大蛇行しているものの、流路が昨年とは異なり、遠州灘沿岸では弱い西向きの流れが生じており、昨年に比べ、シラスの漁場が形成しやすい状態となっています(図1, 2)。一方で、熊野灘及び潮岬以西のマイワシ(未成魚・成魚)漁獲量は少なく、産卵群の来遊は少ない状況で、同海域でのマシラスの漁獲量も低調です。漁業調査船「海幸丸」による3月の卵稚仔(ノルパック)調査でも、マシラスは採集されていないことから、現時点ではマシラスの来遊水準は低いといえます。一方で、カタクチシラスは4月に入り潮岬以西で漁獲が上向いており、黒潮内側域にはカタクチシラスが分布していると思われます。

マシラスが少ないため、4月中旬までは散発的な漁獲が見込まれますが、水温が上昇する4月下旬以降に、黒潮系暖水が沿岸に波及すれば、カタクチシラスのまとまった漁獲が期待できそうです。

【今年】

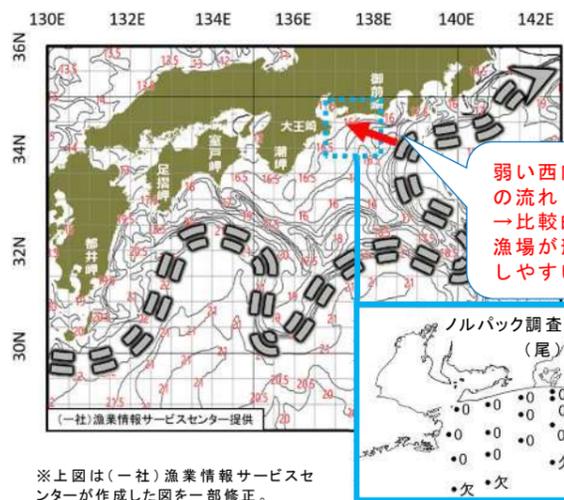


図1 黒潮流路(2024年3月28日)(上図) マシラス採集数(2024年3月4日)(下図)

【昨年】

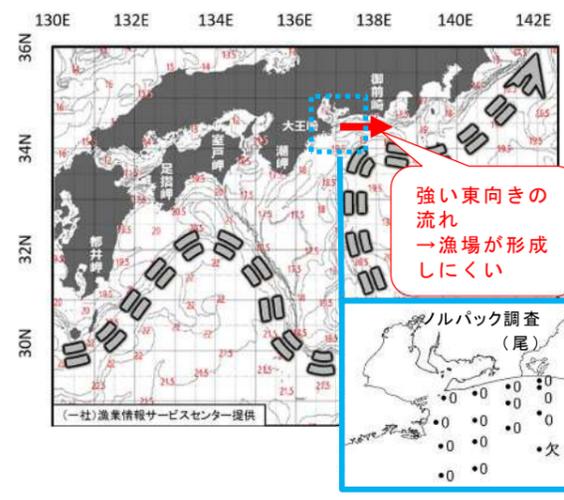


図2 黒潮流路(2023年3月23日)(上図) マシラス採集数(2023年3月16,17日)(下図)

## 水産試験場研究発表会を開催しました

本場 企画普及グループ

水産試験場では試験研究成果を発表する「水産試験場研究発表会」を毎年開催しています。令和5年度は2024年2月29日(木)に蒲郡市三谷町の本場で開催しました。参加者は漁業関係者、一般企業、国・県関係者など約70名で、活発な意見交換が行われました。研究成果の抜粋を以下に紹介します。

○貧酸素水塊の経年変化について(漁場保全グループ 河住技師)

伊勢・三河湾では夏季に底層で溶存酸素飽和度が30%以下となる貧酸素水塊が発生し、水産資源に悪影響を及ぼしている。本研究では三河湾における貧酸素水塊の長期変動の要因について検討した。貧酸素水塊面積は長期的に拡大傾向が確認され、近年、その傾向が強まっていることが明らかになった。変動要因について、全窒素(TN)や全リン(TP)濃度との関係性は見られず、近年の拡大傾向には水温上昇に伴う貧酸素水塊発達速度の増加、密度躍層強化による貧酸素水塊形成期間の長期化等が一因であると考えられた。

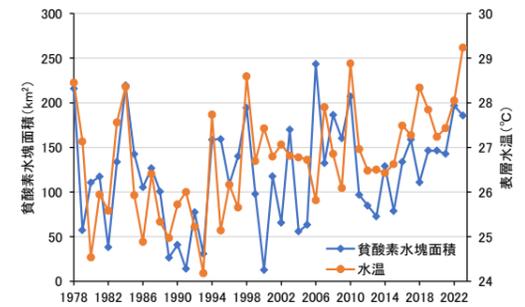


図3 貧酸素水塊面積と表層水温の関係(7-9月平均)

○令和5年度全国水産試験場長会会長賞受賞研究(栽培漁業グループ 日比野主任研究員)

「愛知県海域におけるアサリ資源の減少要因と回復策に関する研究」

現場調査により貧栄養化を起点としたアサリの餌不足や肥満度の低下、及びそれらとアサリ資源形成の関連について検証した。一連の成果は、資源回復に必要な方策、特に貝類増殖場造成事業や栄養塩増加放流のプロセス理解や取り組みの継続のための科学的根拠となっている。また、天然発生乏しい現状で漁獲資源や親貝を確保するために、適正な稚貝移植が必要であり、その効果を上げる手法の一つとして生分解性網袋による保護育成技術の開発を進めている。

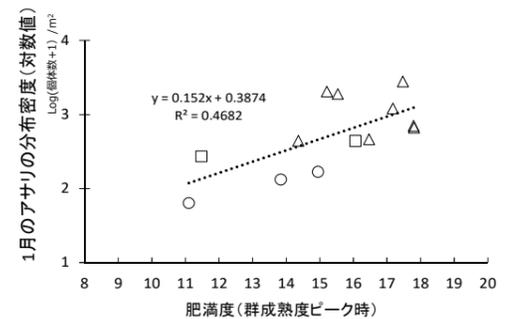


図4 県内漁場におけるアサリ肥満度と分布密度の関係



図5 生分解性網袋による実証試験の作業

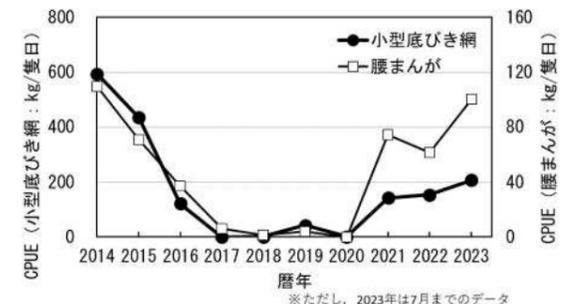


図6 三河湾一色干潟を漁場とする主要漁業のアサリCPUE(1日1隻あたり漁獲量)

